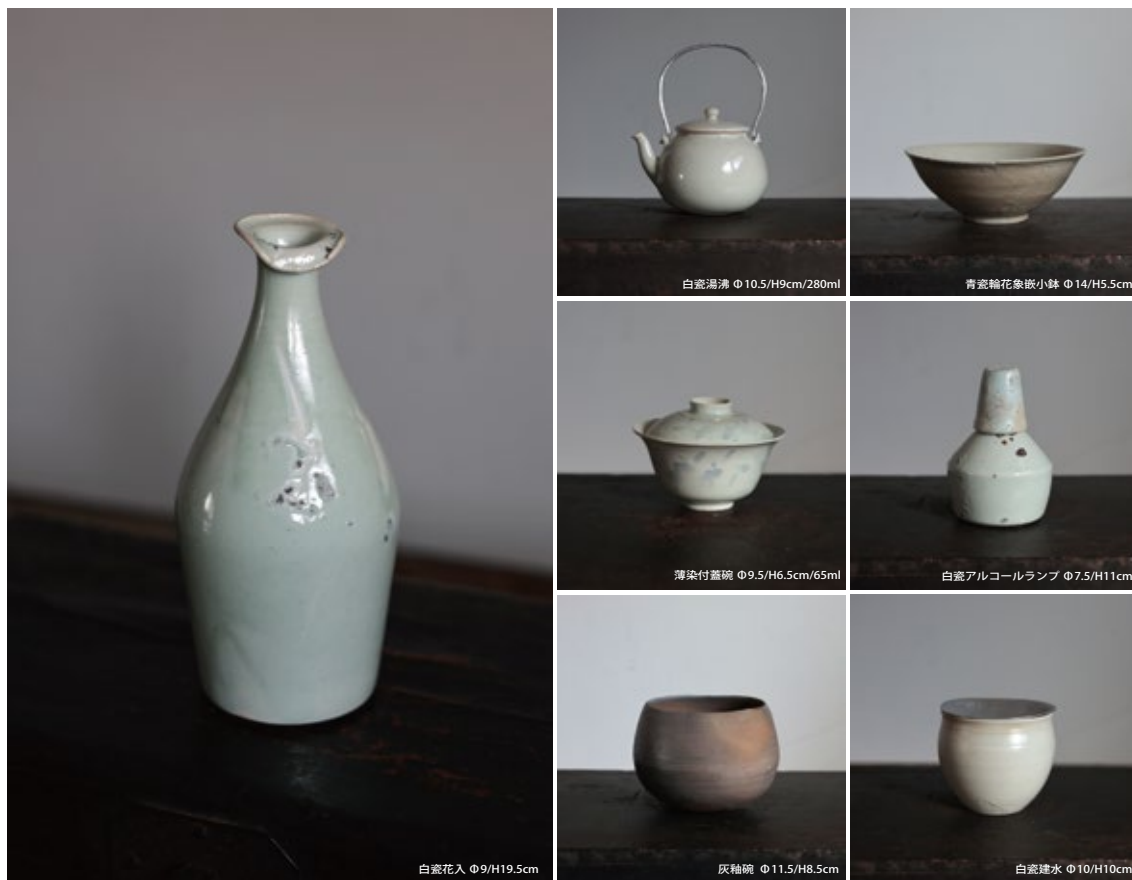




山本亮平・ゆき 展 うつしの美学

2026年3月21日(土)～28日(土)

料金後納  
ゆうメール



## 山本亮平・ゆき展 うつしの美学

2026年 3月 21日(土) ~ 28日(土)

初日 3月 21日の入店は事前予約制(詳細はネット上でご案内します)

作家在廊日 3月 21日

営業時間 11時~18時 最終日は17時迄

ギャラリーうつわノート 埼玉県川越市小仙波町 1-7-6



山本亮平 1972年 東京都生まれ  
1998年 多摩美術大学油絵科卒業  
2000年 佐賀有田窯業大学短期修了  
2026年 佐賀県有田町にて制作

平倉ゆき 1978年 長崎県生まれ  
2000年 佐賀有田窯業大学短期修了  
2001年 絵付師として三年間活動  
2026年 佐賀県有田町にて制作

佐賀県有田町に工房を構える山本亮平・ゆきさんご夫妻。その制作は、約四百年前、江戸初期に焼かれた有田の白瓷に深く根ざしています。工房のほど近くには有田初期の小物成窯や天神森窯の窯跡が残り、出土陶片を手がかりに、石を探し、土を練り、釉薬を調え、ろくろを挽き、絵付けを施し、自作の土窯で薪をくべる。そうした工程の一つひとつ積み重ねながら、往年の質感へと迫ってきました。しかし今、あらためて「うつし」について考えると語ります。私たちは「うつす」を「写す」「映す」の意で理解しがちです。けれど本来そこには、「移す」という能動的で変成を孕んだ力が含まれているのではないのでしょうか。大岡信が『うつしの美学』で述べたように、日本の芸術は写実の巧拙ではなく、「移し」という行為そのものに価値を見出してきた。その視座に立つとき、山本さんたちの営みは、単なる再現を超えた現代的な実践として見えてきます。実際、彼らは土窯を築き、特別な技巧に頼らずとも古典相応の焼成を得られる段階に至りました。では、その先に何を生み出すのか。山本さんは「写しが写してなくなるところまで抽象化したい」と語ります。それは形を誇張することではなく、むしろ要素を研ぎ澄まし、振幅を極限まで抑えること。消え入るような淡い染付、土と石のあわいに揺らぐ白。その静かな表情のなかに、ほのかな感情の震えを立ち上がらせませす。過去を具象的に再現するのではなく、そこに潜む本質を抽出し、いまへと移し替えること。古典という骨格を携えながら、現代の光のなかで静かに息づく器の姿。それこそが山本亮平・ゆきさんによる「うつしの美学」です。どうぞ会場にてその静かな変成の気配をご体感ください。

店主